

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語における情報伝達の方策--スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析--

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-03-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Nomura, Mei<br>メールアドレス:<br>所属:   |
| URL   | <a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1847">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1847</a> |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 博士論文審査の要旨

### (1) 論文の概要

本論文は、スペイン語の間投詞および呼びかけ語の機能を、日本語の終助詞「ね」「よ」との対照によって解明しようとする試みである。次の12章で構成された282ページからなる論文である。第0～2章は序論と概観に充てられる。第3～8章ではスペイン語の間投詞、呼びかけ語を分析する。第9～11章は総合的な議論と結論に充てられる。対象となるスペイン語の形式は以下の通りである。

第3章：一般に付加疑問を表すとされる間投詞 ¿verdad? と ¿no?。

第4章：付加疑問などを表すとされる間投詞 eh。

第5章：敬称、名前などの呼びかけ語。

第6章：知識、理解を意味する動詞に由来する間投詞 sabe(s), entiendes, ves。

第7章：聴覚、視覚を意味する動詞に由来する間投詞 oye, mira, fíjate, verás。

第8章：移動を意味する動詞に由来する間投詞 vamos。

本論文の結論は、次の通りである。①～⑥はスペイン語の個々の表現形式の機能、⑦は文中の位置と機能の関係、⑧はスペイン語と日本語の違いと共通点に関する事柄である。

① ¿verdad? と ¿no? は同義に近いとみなされることが多いが、機能的な違いがある。前者は、発話内容が真であることを前提とし、後者は聞き手が否定する余地を残した表現形式である。

② eh は、文頭では聞き手に向けた注意喚起、文末では先行発話への注意喚起を表す。

③ 呼びかけ語は、文頭では聞き手を特定し、後続発話への注意を喚起する。文末では、聞き手の領域に謂わば声で触れ、情報に話し手と聞き手の心理的關係を付加する。

④ sabe(s) は、「情報が聞き手に受け入れられるだろう」という判断を示す。entiendes は「受け入れがたい情報であっても聞き手に理解してもらいたい」という要求を示す。ves は「先行発話と状況が一致していることを聞き手に確認し理解してもらいたい」という要求を示す。

⑤ oye は注意喚起を示す（文頭では無標、文末では驚き、遺憾さなどの発話態度を示す。「聞け」という原義が残っている。mira は聞き手を理解に導こうとする働きを持つ。「見ろ」という原義は薄れ、脱意味化が進んでいる。fíjate は発話内容が驚きに値することを示す。「注視しろ」という原義が維持されている。verás は「聞き手が自然に理解するだろう」という判断を示す。「見るだろう」という原義は薄れ、脱意味化が進んでいる。

⑥ vamos は「行こう」という語彙的意味を保持し、聞き手を話し手の領域に巻き込む機能を果たす。

⑦ スペイン語の間投詞、呼びかけ語は、文中での位置によって異なる機能を持つ。文頭では、聞き手管理機能を担う。即ち、聞き手をどのように情報へと導くかを表明する。文末では、発話内容に対する話し手の発話態度を示す。

⑧ スペイン語の間投詞、呼びかけ語は、話し手が情報をどう発信するかを強く意識した

表現形式であるのに対し、日本語の終助詞は、聞き手が情報をどう捉えるかを強く意識した表現形式である。この「話し手主体」「聞き手主体」の差は、両言語の指示詞や移動動詞 *ir* と「行く」、*venir* と「来る」にも認められる一般的な傾向である。スペイン語の間投詞、呼びかけ語が日本語の終助詞と機能が一致するよう見える場合が多いが、それは表面的な現象であって、原理は大きく相違している。

以上の結論を導くための論拠は以下の通りである。

① 現代スペイン映画 20 作品のシナリオと DVD を資料に用い、全ての事例について検討した。

② 上記事例の主なものについて、スペイン語母語話者（スペイン人男性 3 名、女性 2 名）にインフォーマント調査を行なった（間投詞、呼びかけ語の省略が可能か、位置変更は可能か、他の間投詞、呼びかけ語に置き換えが可能か、それぞれの場合、どのようなニュアンスを持つか等）。

③ スペイン語、日本語とも、主要な先行研究の成果を踏まえた。

## （2）論文審査結果

評価すべき点：

本論文は、スペイン語の談話標識を日本語と対照して分析した語用論研究としては、おそらく最も詳細で最も優れたものの 1 つであろう。対象となる問題を、音調なども射程に含めるなど、きわめて総合的に追究し、かつ、文頭、文末といった構造的な条件にも目をむけて考察し、有意義で説得力のある結論を導いている。

複数のスペイン語母語話者に実施した大量のインフォーマント調査の結果は、それだけで記述的価値が高いが、それをもとに、個々の談話標識について、文中での位置による機能の違い、日本語の終助詞との対応について説得力のある主張を行なっている。スペイン語学の先行研究の成果を換骨奪胎して自説に巧みに吸収している箇所も多く、ふところの深さを感じさせる。

日本語学についても可能な限り文献にあたり、スペイン語学とのバランスのとれた立場に立っている。日本語を手がかりとすることによって、スペイン語を母語とする研究者が看過してきた談話標識の機能的差異をいくつも浮き彫りにした成果は、対照研究の特質を生かしたものである。「話し手主体」か「聞き手主体」かという両言語の差異は他の現象にも見られる一般的傾向であるという主張は、仮説の原理が *ad hoc* なものでないことの証左である点も評価すべきであろう。

本論文は、日本語学にも貢献している。第 1 に、スペイン語の談話標識には、文法化（脱意味化）が進んだものと、そうでないものがあるという観察が示された。これは日本語の「ね」「よ」からは得られない「文法化」の研究に、スペイン語研究が貢献できることを意味する。第 2 に、文頭の談話標識に「聞き手管理機能」があるか否かという問題を、日本語についても考えてみる可能性を示唆している。

改良の余地がある点：

一方、内容や構成について、いくつか問題点も見られる。第 1 に、語用論の研究であっても、統語面への配慮や方法論の厳密化がより望まれる。文の意味解釈が文脈から得られるものか否かには、統語的範疇の違いが影響することを意識すべきであろう。

第 2 に、「話し手主体」か「聞き手主体」かという結論は簡潔明瞭だが、ややもすると、topic prominent language, subject prominent language という区分と同様、言語事実を過度に単純化して捉える危険があることを常に意識すべきだろう。

第 3 に、章の構成について、より工夫が必要であったと思われる。短い序論のあと、議論がすぐに具体的な分析に移る形になっている。本論文の分量であれば、序論で、どういふ点が問題なのか、どういふ分析方法を採るのか、本編はどのような展開を辿るのかといった見取り図を、もう少し詳しく示す必要がある。

第 4 に、議論の展開において、さらに推敲を重ねることが望ましい箇所がある。① 序論でモダリティの概念を論じているが、その後、この問題が明示的に取り上げられていない。② 「間投詞」と「呼びかけ語」を並べて論じることの必然性について、さらに説明の必要がある。本論文が、スペイン語の呼びかけ語と日本語の終助詞の対照から発展したものである、という前提への理解をもう一步求めるべきだろう。③ 同一の問題の扱い方が章によって少し異なっている箇所が見られる。¿verdad? と ¿no? の働きの違いについての説明は、第 3 章より第 10 章の方が明快な表現になっているので、後者への統一が望ましい。

### (3) 最終試験結果

最終試験は、2014 年 2 月 14 日、本学三木記念会館で実施され、福畠教隆（主査，司会進行）、Montserrat Sanz, 益岡隆志の 3 名の本学教員と、辻井宗明 関西外国語大学教授が審査にあたった。審査は公開で行なわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見、感想、質問を述べ、申請者が回答するという形式で進められた。審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。また、今後、この成果を教育面に応用してほしいという要望も出された。

学位申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場の参加者からも、対照研究の方法論や、本論文では扱われなかった談話標識（pues, bueno, ¿a que sí? など）について、多数の有益な質問、意見を得た。以上をもって公開審査は終了した。

公開審査後、4 名の審査委員は別室で協議を行なった。本論文が、スペイン語学にも日本語学にも貢献する有意義な結論、示唆、データを提供する、優れた研究であることが評価された。

そして、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士（文学）の学位を授与するに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。